現代ギリシア語

ギリシア語　メモワール
－ある偉大な言語の不実な使徒として－

須山　岳彦

わたしは、ある出版社で語学書の編集をしている中年のひとりものです。古典ギリシア語の入門書ということで企画をたてました。準備段階を含めると、足かけ７～８年かかりました。『古典ギリシア語入門』のタイトルで完成したのが去年の１２月。まだまだできたてです。解答付き。徹底して独学者向けという方針でした。この解答付き、という参考書は、古典語に関する限り大学書林の『ギリシア語四週間』ぐらいだったのではないでしょうか。一番苦労したのは、組み版を作ってくれる製版所を確保することでした。ギリシア文字をきれいに、アクセントや書体も問題なく出力してくれるところは、以外に少ないのです。結局当初の予定通りＳ研さんにお願いすることになったのですけれど、紆余曲折がありました。わたくしごとですが、いまでも思い出すのは、関西で行われたフランス文学会からの帰路、新幹線の中で動詞活用表の最終校正をしたことです。なにしろ細かい。電車の快い振動に睡魔の誘惑とたたかいつつ、気息音記号の向きが間違っていないかなどに気を配りつつ、いつ下版できるのか気に病みつつ、大阪で食べたみんみんの餃子やたこ梅のおでん、「うかれ街」動物園前の風景などの記憶を反芻しつつ、けなげにゲラを睨んでいたものでした。（Ｉ田先生、本当にお世話になりました。ご馳走になった水天宮のふぐも、いただいた一升ビンも最高でした。業務連絡、失礼。）

ギリシア語は、はたちの時にはじめて授業に出て以来、もう１６年になります。なります、とか言って、別にたゆまず刻苦勉励してきたのでは毛頭ありません。近ごろに到っては、アルコールの酔いで朦朧となりつつ、枕もとの辞書をひらくやいなや電気も消さずに眠りこけてしまう、といった有り様です。ああダメなわたし。

古典語で、どうしても学生時代に目にしてこのかた忘れられない銘句があり

ます。「カレポン・ト・メー・フィレースタイ」愛されぬことは辛いこと、でしょうか？ひとに愛されるということは幾多の困難を乗り越えねば得られない試練の果ての賜物。そうそうあるもんじゃない。これが得られぬために舐める苦しみ辛酸は、年齢境遇にかかわらず、つねに我が身につきまとうものかと思われ如何ともしがたいのでありました。

現代語はなんといってもカヴァーフィスがきっかけでした。かれの、なんともいえない官能の詩編の数々。安物アクセサリーを売る美青年の手に、「つと触れはせぬか」とはかない期待を抱いて青年の店に日参するオフィス・クラーク、いつまでたっても約束の時間にあらわれぬ恋人を待ちこがれる若者。ふと待ち人が現れたときのえも言われぬ歓喜。恋することのもどかしさ、せつなさをじつに心憎く叙するその筆捌き。N井H夫先生の絶妙の訳業に負うところ甚大とはいえ、わたくしにその気をおこさせたのは、この官能の行き場のなさでした。

直後、F田先生の教えの門を叩いたのは、２５、６の春でした。もう１０年も前。先生、ご執筆の件、くれぐれもよろしくお願い致します。（業務連絡、失礼。）

現代ギリシア語の会話帳ということで企画をたてました。F田先生の教室で知り合った東大の女の子。幾星霜を経て彼女もいっぱしの研究者になっていました。わたしは依然としてただの酒のみドラマーでした。なんちゃって、マジその通り。彼女が懇意にしていた名古屋大のギリシア語の達人。この方（なんとわたしと年齢ひとつ違い）を紹介してもらって主筆として共作していただいたのが、希代の名著『250語でできる　やさしい現代ギリシア会話』でありました。

ギリシアには一度だけ行ったことがあります。１４年前のアテネだけですけれど、なんと物の少ない街だろうと感銘に浸りました。あたかも、物であふれているはずの高円寺界隈から物がすごく減った、という感じでしょうか。空虚な哀しみに満ちていました。ショーウィンドーはほこりまみれ、マネキンの肌はくすんで眼差しうつろ。やたら工事現場が目に付き、遺跡の多いということでは共通するだろうローマと比べて、いかにも潤いがない。

旅から帰ってしばらくして、『旅芸人の記録』を観ました。この国はなんて哀しい国なんだろう、この国の現代史はまことにやりきれない、台湾もそうですが、哀しい現代史を抱える風土にはどうしても惹かれてしまいます。絶えざ

る侵攻と政争と反目と。

ボスニアで紛争が泥沼化していたころ、アンゲロプロス監督は『ユリシーズの瞳』を撮ったのでした。日本の戦後史だって十分に悲惨だといえるけれども、少なくとも内戦とか虐殺とかは無かったわけだし。そう、ギリシアの魅力とは、この潤いのなさ、哀しさ、やりきれない歴史のせつなさなのではないでしょうか。そして、それでも人々は生の愉楽を満喫しているというではありませんか。老人はカフェニオンに居すわり、一杯の酒を前に日がな一日海をながめて動かないというではありませんか。過剰なパロールの奔流に身をゆだね、語り飽かぬそうではありませんか。

消極的でいつも受け身で、人に愛想を尽かされるのを待ってばかりいるわたしの様な人間には、乾いた、哀しみの風土で不屈の生命を漲らせるギリシアのひとびとの暮らしが、尽きせぬ神秘の湧出のシーンそのものに思えてならないのです。

ゼン・フォヴァーメ・ティポタ、イメ・エレフセロス！

Δεν φοβάμαι τίποτα, είμαι ελεύθερος!